

ロバート・ブラウニングとエリザベス・バレット

ルードルフ・カスナー 著
小黒康正 訳

信じてくれたまえ。たとえ私が他に大した価値も無く、
そもそも役立たずだとしても、とにかくひとりの神が
私にあることをもたらしたのだ。惚れ合っている者が
いれば、私にはすぐに分かる。一目見ただけで二人の
ことが。(プラトン『リュシス』)

そう、エリザベス・バレットはある種の神童であった。このことを、頑固で厳しいもの、それでいて善良な父親は知っていたし、弟や妹たち、それに数多くの友人たちも皆、知っていたのだ。従って彼女にとって煩わしい者は誰もいなかった。たとえ大抵の者の見方が多くのことによって違っていたにしても、皆が皆、神童を誇りに思っていたのである。だが、だからと言って、エリザベス・バレットが自惚れることなど全くなかった。とんでもない！他の者たちが彼女のことで喜ぶ裏で、エリザベス・バレットは数多くの些細な内緒事や見解を言い控えていた。エリザベス・バレットは何の造作なく物事に行き着いていたのだ。父親、弟や妹たち、友人たちは「エリザベスには才能がある」としかおそらく言っていなかったのであろう。ただそれがすべてではなかった。エリザベス・バレットはまさに物事だけを感じ取るばかりで、何の心配も責任も感じないまま物事を愛したが、それはまるでエルフ〔森の妖精〕やパック〔いたずら好きの妖精〕のような者の愛し方だったのだ。それですべてが彼女の世界に同時に入ってきては相並び、この世界で折り合った。つまり、書物も、父親の庭園も、自分のポニーも、ホメロスも、非常に多くの言語も、ヘブライ語でさえも、哲学体系も、当然のことながら特に自由思想家のそれも、詩人も、それにそもそも偉大なもの、美しいもの、善なるものすべてが折り合ったのである。これらのものすべては、大聖堂のように、夢のように、エリザベス・バレットの周りをぐるりと取り囲んでいて、完全に彼女のものになり、彼女を実に奇妙なことに密かでありながら同時に明瞭な存在にした。エルフのように、パックのように、密かでありながら明瞭な存在にしたのだ。本物と本物ではないものとの区別、それを当然のことながら、エリザベス・バレットは後になって初めて学んだのである。

なにしろ夢の中では本物しか生きていない。すなわち、彼女はホメロスと（当然のことながらいくらか誇張になるが）詩人のヘーマンス女史〔一七九三—一八三五年、イギリスの詩人〕に愛情を感じていて、ホメロスとヘーマンス夫人のことを話すと、言葉に違いはなかった。つまり、おどおどしながら物事を愛する者にすれば、かくも異なる二つの物事にたとえほんの一瞬たりとも同じ言葉をあてるとなると、おそらく不安になるに違いない。しかしエリザベス・バレットがこうしたことで煩わされることは無かった。一度たりとも無かったのである。エリザベス・バレットの言葉は決して整っていなかった。彼女は文体をあまり高く評価しなかったのだ。彼女は感情に満足しており、加えて彼女なりにいろいろ思うところも多かったが、もっとも後になって高度な理性と優れた判断力をもったのである。

エリザベス・バレットは夢からすぐには抜け出さず、いかなる他人も彼女の幸せをめぐって彼女と争うことは許されなかった。確かにそうだ。なにせ彼女は何の分け隔てなく愛したからである。だが、違う。彼女は他の何にもまして弟を愛していた。この弟がトーキー〔イングランド南西部の町〕でボートに乗って沖に出て行ったときのことだ。エリザベス・バレットは弟とたまたま同時に出て行った二艘のボートが戻って来るのを窓から見ていた。だが、弟を乗せたボートは戻って来なかったのである。苦痛はあまりに大きく、姉は数週間にわたり意識を失ったかのようにベッドに横たわり、徐々に目を覚ましたのだった。数年間、彼女はこのことについて話すことができなかつたのである。苦痛は愚にもつかない大きさで、生じてはならないものだった。それは苦痛のことだが、しかし、長患いなら生じて当然だったであろう。果たして長患いにかかったのだ。彼女はどういうわけか事故に遭い、それが病気になる、ついには長い、長い患いとなり、長患いは見たところ彼女から消えようとしなかつた。長患いはなるほど彼女から夢の形象を取り去らず、そうした形象を吹き飛ばしはしなかつたが、とはいえエリザベス・バレットは彼女の全世界が夢にすぎず、大聖堂にすぎないと分かり始め、生と光と生き生きとした声がまったく違うどこか外側にあるのだとうすうす感じた。都会から、田舎から、異国の長旅から病室に入って来た弟妹や友人たちとなると、おそらく皆そうしたところからやって来たには来たが、たとえ彼らは何もかも言おうと思ひ、そうできたところで、エリザベス・バレットは最後まで彼らに耳を傾けなかつたであろう。彼女がその時まで徹底的に知っていたことによって、彼女はただ長患いを告げられるしかあり得なかつたのである。長患いが、いや、ただ長患いだけが初めて彼女に高度な理性を、優れた正義感をもたらし、彼女は長患いがもとで今や数多くの些細な見解や内緒事を失ったものの、その代わりに長患いから他人のどんな意見をも許容する理解力を得たのだ。それから、長患いが自分に、ただ自分だけに語ったことに、最後まで耳を傾けた。彼女は後に長患いのことを自ら恋人に書いている。長患いが私に語るのです、しかも私に罪について語るのです！ そうして罪がますます深くなっていくのです、と。エリザベス・バレットは罪を追い求め、追い求め続けるあまり、至った患いがあった。ついに今や道が開け、自分が一歩ごとに完全に一人で歩み、開けた道のはてにすっかり行き着くと、もはや罪ではなく、死を、いやそれどころか時には大きな光のよ

うに神を見るという思いに至ったのだ。だが、そこには……。「私が真っ直ぐ神を見上げますたびに」と彼女はロバート・ブラウニングに書いている。「何であれ、何者であれ、いつもなら途上で私を遮るものは無かったのですが、今やあなたがいるのです。途上で私と神の間にいるのは、あなたしかおりません！」と。

ロバート・ブラウニングはエリザベス・バレットとかなり違っていた。二人はまったく違っていたので、ひとつの事例として意図され、そうなるように手はずが整えられていたに違いないと少なからず思われたのだ。両者の違いは、ある種の顔立ち、外的事情の類似によって、とりわけ際立つ。ロバート・ブラウニングもまたその時までは彼の歩みをどうやら苦もなく進んできたようだ。誰であれ喜びと好意を抱いて彼を眺めたか、あるいは喜んでいくらかお供をしたか、あるいは自分や他人のことを彼に語らせたのである。ロバート・ブラウニングはいつであれどこからかやって来て、いつであれ新しいことを知っており、物事の気配や光に関する何がしかを他の者たちに伝えたのだ。彼はさらに外からの動きを室内に持ち込み、彼の詩の多くと同様に、おそらくいつでも興奮気味だったが、しかし、間の取り具合のよいものが常に喜ばれるのと同じように、彼は喜ばれたのである。私は彼の完全にでき損ないの書物にさえも、私の感覚からすれば実際にエリザベス・バレットのもっとできのよい詩に大抵は欠けているもの、つまり雰囲気であり、間を感じる。ロバート・ブラウニングの最も美しい詩の数々には、私なりに言うと、夢と努力の露があり、オリンピック競技走者たちの額や全身に現れる息や汗があるのだ。こうしたものはまた、エリザベス・バレットが彼に対して実に心をこめて感謝したのもでもあった。つまり、人生と光と多くの生き生きとした声があったところから、ロバート・ブラウニングは彼女のもとにやって来たのである。

ロバート・ブラウニングは外からもたらされる心配事、外の紛争を知らなかった。宗教的資質の持ち主だったからだ。理由はただそれだけにすぎない！ 作家ともなれば詩人的資質が有する宗教的なものについて必ずしもかくも軽々しく語るべきではないし、特にこうした目的のために設けられた汎神論の教会にブラウニングや例えばシェリー〔一七九二—一八二二年。英国の詩人〕を送り込むべきではなかった。そのようなことは混乱を招き、そのうえ不誠実である。実際に汎神論は、今日、文士たちの迷信になっていた。自分たちの単なる言葉ですべてを手中におさめていると思う者なら誰でも抱く迷信になっていたのだ。文士にとっては、もはや黒づくめのイエズス会士と白づくめの汎神論者しかいないかのようである。汎神論は文士たちの間ではまるで片がついているかのようだ。まさにイギリス精神の持ち主に対しては、感情のこうした浅はかさに用心するのがよかろう。ロバート・ブラウニングの宗教はかなり精神化されたプロテスタンティズムであった。さりとて彼は、イギリスのとある伝記作者が手短で、確信した、見当違いな言い方をしているのとは違い、いまだピューリタンではなかったのである。ロバート・ブラウニングの宗教は、神について確かめ、魂を救おうとするかなりの精神的な良心であり、かなり情熱的な努力であった。「わが魂を救う」という表現は、彼の詩からも、彼の手紙からも、読み取れることが多い。ロ

バート・ブラウニングは字義どおりの抗議する人で、好戦的であり、イギリス道徳の国民的英雄バニヤン〔一六二八—一六八八年。『遍路歷程』の作者〕が描くクリスチャンのような性格の持ち主であったが、なんら教義教説をもたず、あらゆる点で劇的だった。

ロバート・ブラウニングは誘惑と試練、義認と実現について語ることを好んだ。すべてを一からやり直し、かくして円熟、成就、実現を望んだのである。始めと終わりの間には、彼にとって教義ではなく、劇があり、人生があった。私はハーマン〔一七三〇—一七八八年。ドイツの神秘主義者〕の『我が経歴を思う』から美しい文章を読み上げよう。「何を行ったところで、何を試みたところで、私は未熟な果物であります。神の不在のまま敢えて行い始めたところで、いずれも終りを迎えるどころか、穴が空いてしまったからです」¹と。ロバート・ブラウニングの行動ははたしていつも「終りを迎える」ものであり、「穴が空く」には至らず、あとは散漫になって無くなってしまわずだ。詩においては、ブラウニングの英雄ならどんな場合でも必ず抱く憧憬がある。かような成就、極致、完結、存在、音楽がそうだ。それゆえ、こうした高遠な精神的目標ゆえ、ブラウニングはあつという間に不安になった。ある行動があまりにも過剰、散漫、横暴、不自然である場合と同じように。何であれ彼を免れてはならず、彼にすれば何であれ見逃し忘れてしまうつもりなどなく、何もかもが彼の目の前になければならぬ。彼は真のプラトン主義者が抱く現前に対する唯一の憧れを有していた。「人生を一からやり直した私は、何も忘れることができないのです。」こうなると絶えず彼は思うことがある。すでに自分は完成しているので、閉じこもり、一人で生き、自らの経験を利用し尽くしてもよいのだ、と。つまり、これは目的意識のはっきりした者たちの幻想であり、彼らの不毛な瞬間である。そんな時に彼はエリザベス・バレットに出会うのだ。

ブラウニングは再びすっかりと心を開く。何もかもがもう一度、彼の目の前に存在する。なにしろ彼は何もかも愛していたからだ。

エリザベス・バレットは度重なる長患いによって、ロバート・ブラウニングは度重なる行動によって疲れ果てていた。

今や二人の間で持ちつ持たれつの美しい関係が、真に創造的な愛による幸せなやり取りが始まる。二人の態度を生き生きと捉えるためには、書簡を読まなければならない。²私には書簡を大づかみに示すことしかできないだろう。エリザベス・バレットは目を覚ます女性のように、長々と見つめ、初めはそっとかわし、押しつけてしまう。あまりの幸せに自己不信の念が満ちる。ただ謙虚に受け入れるだけしかない。あたかも恋人が彼女に何もかも貸す一方で、彼女にすれば相手に何もかも返さなければならず、(ほとんど何も無いにしても)一緒に持ってきたほんの僅かなもの以外何も持つてはならないかのようである。ロバート・ブラウニングは饒舌で、激しく、ときには必死に訴え、ときには強引に押し戻し、人目につく。つまり強者なのだ。いつであれ気持ちをもっと表明しようと思うものの、十分には行い述べたとは思っていない。エリザベス・バレットは常にあるがままの自分である。ロバート・ブラウニングは依然として自己証明しようとするのだ。

以前からあなたを愛しておりました、とエリザベス・バレットはブラウニングに書いています。皆が皆、私のことを好きになってくれましたが、誰も私を理解してくれなかったのです。亡くなったある方がかつて私にこう言いました。「君がいつか人を愛するとしたら、それは中途半端な愛ではない。君は生死をかけて愛するであろう」と。まったくそのように私はあなたを愛しています。生死をかけてです。私の愛は私よりも偉大で、固有の生命のように生きて動く偉大なものであります。私の愛はあまりに偉大で完全なので、すべての偉大で完全なものと同じようにただ啓示されるしかなく、死者たちによって、夢の中で、死に行く者たちによって私に啓示されることがありました。いつか愛されるなんてあるわけがないと私は思っていたのです。そこで彼女はスタール夫人〔一七六六—一八一七年。フランスの小説家・批評家〕の言葉を自分に当てはめる。「私は自分が愛するように愛されたことは一度もありませんでした」と。それで私は今や自分が愛を前にして、基盤を失い、道理を失っているかのように感じるのです。愛は私にすべてを、すべてを与えるはずで、私はへりくだり、頭を垂れています。愛は王冠なのです。もしあなたが私からあなたの愛を再び取り上げようとも、私は決して尋ねはいたしません。あなたが愛を今どこに差し出そうとしているのか、と。私の思いはただあなたの愛だけで、それ以外は何も思っておらず、私の思考は愛の中で失われます。ちょうど視界が光の中で失われるように。と申しますのも、あなたがもたらすものは、そう、生のすべて、すべてだからで、失われた生と決して所有されることのなかった生、その両方なのですから。

エリザベス・バレットが書簡中にも書いている荘重なものは、同時に、すべてが彼女の本当に美しい『ポルトガル語からのソネット集』³の中であたかも啓示されているかのようだ。ロバート・ブラウニングの書簡中にある荘重なものは、それはそれで、彼の詩や劇で男性が恋人に次のように語る箇所、すべてが再び見出されるであろう。

私の運命を実現させたまえ！

いま私の樂園を叶えたまえ！ 君が私のものだと知らせたまえ、
君が私のものだと証し、私の名を君の額に記したまえ、
君を抱き、君を私のものとし、それから死なせたまえ、
神の思し召しがあるならば、わが魂の成就とともに。⁴

エリザベス・バレットはロバート・ブラウニングが計り評価すべく存在する者、主君、征服者、目標、理念だと感じる。ロバート・ブラウニングは彼女にとって多にして全であるが、もっとも彼女にとってとりわけ大きく、軌道であり、倍数の魔術なのだ。

彼は道、彼女は野。彼女は川、彼は橋。ロバート・ブラウニングはエリザベス・バレットにおいて調和を愛する。つまり、ブラウニングにすれば、相手は自分よりも自然であり、直接的であり、誠実であるように思えるのだ。相手に対して彼は自分が意図的であり、間接的であり、散漫であり、不誠実であり、底意があるように思える。彼女は彼にとって中

心点であり、素数の魔術を持つ。言い換えると、彼は魔術、彼女は鏡。彼はいつも自分が外側の回り道にいるように感じるが、彼女は自分の内側におり、そこに留まっていた。ちょうどノヴァーリス [一七七二—一八〇一年。ドイツの詩人] がゾフィー・キューン [ノヴァーリスの若年の恋人] について書いている言葉のように。「彼女は何ものでもあろうとしません。彼女は何かであります。彼女の自然は私たちの人為であり、私たちの人為は彼女の自然であるようです」という言葉がそれだ。ロバート・ブラウニングは上をめざす努力家であり、エリザベス・バレットは高貴な存在だった。あるいはちょうどロバート・ブラウニングの『露台にて』でノルベルトがコンスタンツェに言う言葉のようだ。

私は一生をかけて進む

君が君のものを凝縮させている瞬間を分解し

君の周りをゆっくりとした周期で動かなければならない

まさに君になろうとして⁵

私はすでに示唆したが、エリザベス・バレットには理性が多く、ロバート・ブラウニングには ^{ディアレクティク} 論理が多かった。もしうまい比喻で言い直してもよいのであれば、エリザベス・バレットはどちらかといえば演繹的であり、ロバート・ブラウニングは帰納的である。エリザベス・バレットの場合、感情に基づく演繹であり、女性として、女性の抒情詩人として、ライプニッツ [一六四六—一八一六年]、スピノザ [一六三二—一六七七年]、ヘルダー [一七四四—一八〇三年] のような人物の哲学を受け入れるのが常なのであろう。自身の哲学が結局は他のどんなものよりも調和のとれた感情であるならば、方法というものは、誰にとっても技能のひとつであり、彼女にとってもまさにそうであった。エリザベス・バレットは「なぜそうでないのか」と言っていたのに、ロバート・ブラウニングは「なぜそうなのか」といまだ問うていたのである。ロバート・ブラウニングはカント的精神の持ち主で、下から始めて、範囲をとらえ、常に新しい数多くの方法を有した。彼は方法のための方法を愛したのであり、劇作家だったのだ。しかし、それにもかかわらず、いや、少なくとも恋人として、それだからこそ、彼はエリザベス・バレットの先験的認識論を折に触れてうらやみ、それが秀でた、自由なものであり、それどころか天才的なものだと呼ぶ奇妙なときもあったのである。

エリザベス・バレットは例えば、なぜカーライル [一七九五—一八八一年。イギリスの著述家] が歌と行為を区別したのか、その区別をどのように行ったのかを理解しなかった。カーライルはチェルシー [ロンドン南西部] の邸宅に頻繁に訪ねてきたロバート・ブラウニングにある時こう言っていたのである。「今日、問題は歌ではない。行為である。君たちは皆、とにかく行動すべきだ！」と。この言葉にエリザベス・バレットは言い返す。「歌は行為です。シェイクスピア [一五六四—一六一六年] の歌はクロムウェル [一五九九—一六五九年] の行為よりも偉大です」と。彼女は理性的で、当然のことながら言っていることは正しいが、カーライ

ルに理解のあったロバート・ブラウニングにはもっと様式^{シメティール}がある。

別の例を示そう。彼女はロバートの旅行のことを、彼が日々当然出会うことになる多くの人々を、彼の大きい現実をうらやむ。これに彼は相手に答えて言う。「すべては結局、生得の考えに立ち戻るのです」と。エリザベス・バレットは見事に話を結ぶ。「ですけどあなたは決して私を説得しませんわ。私が持ち合わせないものゆえに、私の方が立派だとか、対等だとかなどとは」と。

これらの書簡から愛する男と愛される女の駆け引きを見て取ることは、結構なことである。「愛する者と愛される者を一目で区別する」天賦の才しか持たぬと自慢していたソクラテスの喜びが実際に感じられるのだ。それでロバート・ブラウニングはある時、エリザベス・バレット宛にこう書く。「僕はある意味で絶対的な畏敬の念で君を見つめます。君のような人が生きて、呼吸をし、動きながら、すんだ空気中に入っていくなんて、僕には理解できません」と。エリザベス・バレットは（まさにこの引用と当然のことながら直接関連づけられないまま）ロバート・ブラウニング宛にこう書く。「私はあなたが私をまったく愛していないと思っておりました。あなたは外の空気中で愛したのだと、私は思っていたのです。哲学者たちならア・プリオリな愛だと言ったでしょう」と。

両者の間には真に偉大な関係は無いのか。エリザベス・バレットに対するロバート・ブラウニングの愛には、こうした書簡において、偉大な表現が与えられており、シェリー〔一七九二—一八二二年〕のプロメテウスにおけるエイシャに対するプロメテウスの愛や、リヒャルト・ヴァーグナーのジークフリートにおけるブリュンヒルデに対するジークフリートの愛に等しい。これは成熟した人間の愛である。この愛には疑念や虚栄が微塵もなく、二人の名声や感謝の念に等しい。この場合、愛は二人の創造物であり、運命以上のものである。

訳者注（比較的短い注に関しては、〔 〕を付して本文中に組み込んでいる。翻訳底本の訳注は大いに参考にした。）

¹ Johann Georg Hamann: Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe von Josef Nadler. Bd. II. Wien 1950, S. 27.

² The Letters of Robert Browning and Elizabeth Barrett Barrett 1845-1846. With portraits and facsimiles. In two Volumes. London 1899.

³ 一八五〇年に発表された同書は、リルケによってドイツ語に訳出され、一九〇八年にインゼル社から出版された。Vgl. „Elizabeth Barrett-Browning, Sonette aus dem Portugiesischen, übertragen durch Rainer Maria Rilke“, Leipzig: Insel-Verlag 1908.

⁴ ロバート・ブラウニングの詩集『男と女』Men and Women（一八五五年）に所収された「露台にて」In a Balcony（一四行目から一八行目）より。

⁵ 「露台にて」In a Balcony（六三九行目から六四二行目）より。

翻訳底本

Rudolf Kassner: Robert Browning und Elisabeth Barrett. In: ders.: Sämtliche Werke. Bd. II. Im

Auftrag der Rudolf Kassner Gesellschaft herausgegeben von Ernst Zinn und Klaus E. Bohnenkamp. Stuttgart: Klett-Cotta 2001, S. 122-130. 以下の「訳者後記」にて同全集から引用する際は、巻数と頁数を括弧内に漢数字で示す。なお、『十九世紀』からの引用の際には、ルードルフ・カスナー『十九世紀』（小松原千里訳、未知谷、二〇〇一年）を参照した。

訳者後記

ルードルフ・カスナー〔一八七三—一九五九年〕は、一九〇六年五月、ベルリンのフィッシャー社から『モティーヴェ』*Motive* を公にした。初期カスナーの代表作と称すべき同書には、次のようなエッセイ八本が所収されている。

- 一 「セーレン・キルケゴール 箴言風に」（拙訳、九州大学独文学会『九州ドイツ文学』第二十七号、二〇一三年、一一四七頁）
- 二 「ロダンの彫刻に関する覚書」
- 三 「絨毯の倫理」（拙訳、九州大学大学院人文科学研究院『文学研究』第百十一号、二〇一四年、六七—八二頁）
- 四 「修道院長ガリアーニ」
- 五 「ロバート・ブラウニングとエリザベス・バレット」（本訳出）
- 六 「エマソン」
- 七 「ボードレール」
- 八 「ヘッベル」（拙訳、九州大学大学院人文科学研究院『文学研究』第百十号、二〇一三年、二九—五四頁）

カスナーは「ロバート・ブラウニングとエリザベス・バレット」を『新展望』*Neue Rundschau* 一九〇四年七月号にて初めて公にし、その後、僅かな加筆修正を行った上で、一九〇六年発行の『モティーヴェ』*Motive*、更には一九二三年発行の『エッセイ集』*Essays* にも掲載した。

ここに訳出したカスナーのエッセイを理解するために、まずは関連する伝記的事実を略述しておこう。ロンドン生まれのイギリス詩人ロバート・ブラウニング〔一八一二—一八八九年〕は、一八四五年、病床の詩人エリザベス・バレット〔一八〇六—一八六一年〕との文通を二回目のイタリア旅行を終えた直後から始め、大恋愛の末に一八四六年九月十二日に二人だけで結婚式をあげ、一週間後、フランス経由でイタリアへ駆け落ちした。フィレンツェに居を構えた二人のイタリア滞在は十五年間に及ぶ。この間、エリザベスの健康は奇跡的に回復し、一八四九年三月、後に彫刻家となるロバート・バレット・ブラウニングが生まれた。このような一連の出来事を経て、エリザベスは「ポルトガル語からのソネット集」を含む『詩集』を一八五〇年に公刊した。さらに、約一万二千行に及ぶ『オーロラ・リー』が一八五七年に世に問われると、この長編物語詩が女性と社会の問題を扱う先駆的作品として高い評価を受け、併せてエリザベスの名声も頂点に達した。他方、ロバートの場合、息子誕生後のまもない頃に故郷の母が急死した知らせを受けると、宗教に対する自らの関心と呼び戻した『クリスマスイブと復活祭』を一八五〇年に出し、一八五五年には劇的独白の手法を用いた『男と女』を世に問う。一八六一年、エリザベスが五十五才の生涯を閉じると、ロバートは失意のうちに息子とともにロンドンに帰り、試作に専念する孤独な生活を続ける。そうした中で一八六八年に代表作『指輪と本』を出し、翌年に完成させると、テニソンと並ぶヴィクトリア朝を代表するイギリス詩人という世評が高まり、生存中にブラウニング協会が設立されるまでに至った。

ロバートの詩は、総じて複雑多彩であり、読者の安易な理解を受け入れない。現世の複雑なもつれを力強くごつごつと描きながら、同時に永遠への憧れを詩的言語に巧みに昇華

させている。『男と女』の記者「あとがき」で紹介されたローマ・キングの評言によれば、ロバートの詩は「静というよりも動、在るといよりも在るべき状態」に特色を有し、特に中期以降では「全一・単純よりも複雑・多彩が彼の目標となった」のである。もっとも、一九五七年の同評言よりも五十年以上前に、つまり一九〇四年の時点で、カスナーはロバートのことを巧みに評していた。「ロバート・ブラウニングはカント的精神の持ち主で、下から始めて、範囲をとらえ、常に新しい数多くの方法を有した。彼は方法のための方法を愛したのであり、劇作家だったのだ」と。このようにカスナーは劇的独白の手法を展開させる詩の内実を早くからの確に捉えていた。カスナー後期の代表作『十九世紀』（一九四七年）によれば、「ロバート・ブラウニングの劇はすべて会話である。常にそこでは、互いに意見を押し付け合い、反対の態度を取り合い、啓蒙し合う二人しか問題とならない。彼の詩もそうした自己対話である。」（八一三二一）

もっとも、カスナーが本エッセイにて示した慧眼は、ロバートに対する評価というよりも、ロバートとエリザベスを同等に評したこと、いやそれ以上に、エリザベスに対するロバートの「うらやみ」を扱ったことにある。それは「自然」に対する「人為」の嫉妬と評してもよいかもしい。彼はエリザベス・バレットの先験的認識論を折に触れてうらやみ、それが秀でた、自由なものであり、それどころか天才的なものと称する奇妙なときもあった」とカスナーは言う。詩を生み出す動因は何かと問えば、「人為」においては「^{モティーフ}論理」による「帰納」であり、「自然」においては「感情に基づく演繹」である、とカスナーは答えよう。「軌道」であり「^{モティーフ}倍数の魔術」と称されたロバートは、相手に強い憧憬の念を抱く。

ブラウニングにすれば、相手は自分よりも自然であり、直接的であり、誠実であるように思えるのだ。相手に対して彼は自分が意図的であり、間接的であり、散漫であり、不誠実であり、底意があるように思える。彼女は彼にとって中心点であり、素数の魔術を持つ。言い換えると、彼は魔術、彼女は鏡。彼はいつも自分が外側の回り道にいるように感じるが、彼女は自分の内側におり、そこに留まっていた。

相手を中心とみなし、みずからを周辺と卑下するロバート・ブラウニングは、『モティーフ』所収のエッセイ「修道院長ガリアーニ」において、スタンダールとともに、十九世紀の典型的な人物とみなされていた（二一一二〇）。再び『十九世紀』に依拠して言えば、「形式なき世紀」である十九世紀において、ロバート・ブラウニングが描く人間たちは、「かなり興奮した状態で、言葉を介して互いに意志を疎通させるのであり、互いに言葉でけなし合う」（八一三二一以下）。こうした激しい言葉によって形式はことごとく失われていく。カスナーにとって、十九世紀は「^{ディアローグ}対話」の時代であり、「^{ディアレクティク}論理」の時代である。その意味で、ロバートの劇的独白は単なる文学的手法にとどまらない。十九世紀において、ひとは常に他者を必要とする。このことは現代においても変わりがない。たとえ自己対話であっても、他者を前提に言葉を発せざるを得ず、その意味でひとは他者の意志から抜け出すことはできない。こうした近代的人間の典型をカスナーは「ロバート・ブラウニングとエリザベス・バレット」において前者から看取り、後に『十九世紀』においてそのイギリス詩人が描く人間たちのことを次のように総括する。

こうした人間たちにおいて、男も女も、情熱は完全に意志になってしまい、意志において深まるか、あるいは意志のなかに閉じこめられている。互いに相対する意志のなかに、相手に対する意志のなかに、他者による、男が語るときは女による補いの意志のなかに……（八一三二二）

近代的な自己が常に他者の「補い」を必要とするならば、ここにおいてエリザベスに対

するロバートの「うらやみ」が何であったかが明らかになろう。「自然」に対する「人為」の嫉妬であれ、「周辺」が「中心」に抱く卑下であれ、そこには、他者を必要としない人間に対する他者を必要とする人間の強烈な「〈自-他〉意識」が根づく。とするならば、「ロバート・ブラウニングとエリザベス・バレット」というタイトル中の「と」はすでに並列の機能を失っており、いまや全体が右側に傾く。但し、本エッセイの執筆時において、エリザベス・バレットに対する関心は総じて失われていたことも忘れてはならない。エリザベス・バレットへの関心は十九世紀末において既に下がり、詩作品の評価においても、ロバート・ブラウニングのそれに先んじられていた。エリザベスに対する再評価は、フェミニズム批評が台頭する二十世紀後半を待たねばならない。その間、ドルフ・ペジェの戯曲『ウィンポール通りのバレット家』（一九三二年）によってロバートとエリザベスの大恋愛に対する関心が高まり、同戯曲に着想を得て書かれたヴァージニア・ウルフの『フラッシュ——或る伝記』（一九三三年）にてエリザベスの詩作品に賛辞が寄せられ、更には一九三四年にペジェの戯曲がアメリカで映画化されることもあったが、ロバートとエリザベスがバランスよく「と」で結ばれることはなかったのである。

長らく全体が左側に傾いていたことを思い返すと、カスナーのエッセイがいかに時代に先駆けていたかが分かる。もっとも、『モティーヴェ』のいずれのエッセイについても言えることだが、カスナーの着眼は単に先見の明ありと称されるだけのものではない。いずれも十九世紀の原型もしくは典型を扱い、近代とは何かを問いかけながら、現代の私たちに新たな見方を促す。『モティーヴェ』はまさに動因に他ならない。「ロバート・ブラウニングとエリザベス・バレット」の場合、左側に傾いた状況を時代に先んじて均衡にし、同時にエリザベスに対するロバートの愛を洞察することでみずからの均衡を破る。このとき、全体はこれまでになく右側に傾く。ひとりの女性に対するひとりの男性の愛が単なる伝記的なレベルで紹介されるだけでは、新たな傾きは起こらない。エリザベスに対するロバートの愛には「偉大な表現」 *groß ausgedrückt* が与えられている。カスナーの思想全体において「表現」 *Ausdruck* が重要な役割をはたすことをここで忘れてはならない。それは、思想や感情などの「内なるもの」を言葉や表情などの「外なるもの」に表出することにとどまらず、むしろ、人間的生が感性的世界へ外化されることとして、まさにディルタイの言う「生の表出」 *Lebensäußerung* に近い。但し、カスナーの「表現」は、表現しがたいものの表現として、常に矛盾をはらむ。例えば、ドイツ表現主義が非日常の感覚に喚起された革命的な芸術運動であったように、カスナーの場合、通常の型にはまらない、極めて特異で、ときには常軌を逸するものこそが、「表現」対象である。このことをカスナーは一九二五年刊行の『変身』にて端的に言い表す。

実際にそこには何か恐ろしいもの、生ある炎のようなもの、常軌を逸したものがあつた。ああ、例によって言葉にならない！（四一八一）

今回訳出されたエッセイでは、エリザベスに対するロバートの愛は、エイシャに対するプロメテウスの愛や、ブリュンヒルデに対するジークフリートの愛に等しいとされた。現実の愛が非現実の愛に、それも「偉大な」愛に結びつく。それはまさに常軌を逸した「表現」に他ならない。これは、近代の枠内に生きる存在が近代を超越していると見なされた存在に出会ったときの驚嘆から表出され、こうした邂逅の彼方へと私たちを導く。「ロバート・ブラウニングとエリザベス・バレット」がもたらす動因^{モティーフ}は、二人の運命的な出会いを超えて、いまだ表現を得ない何かへの創造へと私たちを促す。その意味で「愛は二人の創造物であり、運命以上のものである」。

参考文献

-
- ロバート・ブラウニング『男と女——ロバート・ブラウニング詩集』、大庭千尋訳、国文社、一九八八年。
 - エリザベス・バレット・ブラウニング『オーロラ・リー』、小塩トシ子訳、九州大学出版会、二〇一三年。
 - 平井裕美「Aurora Leigh as Barrett Browning's Defence of Poetry: Mediating between Sprituality and Modernity」、博士論文（九州大学）、二〇一四年五月。